# ジョルジュ・ビゼー（Georges Bizet, 1838 年–1875）

フランスの作曲家で、オペラ《カルメン》などで知られています。彼は短い生涯の中で、フランス音楽に大きな影響を与え、特にオペラにおいて重要な位置を占めました。

## 生涯

### 幼少期と教育

ビゼーは 1838 年、パリに生まれました。音楽一家に育ち、幼い頃からその才能を発揮していました。わずか 9 歳でパリ音楽院（コンセルヴァトワール）に入学し、そこで作曲を学びました。特に、ジャック・アレヴィやフランソワ・ブノワなど、当時のフランス音楽の重要人物から教えを受けました。

1857 年には、優れた若い作曲家に与えられる賞であるローマ大賞を受賞し、ローマで 3 年間過ごしました。この経験が後の作曲活動に大きな影響を与え、イタリアの音楽スタイルとフランスの伝統を融合させる作風が見られるようになります。

### キャリアと成功

ビゼーは帰国後、作曲家としての活動を本格化させますが、当初はそれほど成功を収めることができませんでした。彼のオペラ作品や劇音楽は評価されず、彼自身もそのことで悩んでいました。ビゼーはピアノ演奏や編曲などの仕事をこなしながら、作曲に励んでいました。

1875 年に初演されたオペラ《カルメン》は、初演時には批判を浴びたものの、ビゼーの死後にはフランスだけでなく世界中で絶賛されるようになり、彼の代表作として知られるようになりました。

### 晩年と死

ビゼーは心臓病を患っており、1875 年に 36 歳の若さで亡くなりました。彼の死後、《カルメン》が成功を収め、ビゼーは偉大な作曲家としての評価を確立しました。

## 作品

ビゼーの作品は、オペラ、劇音楽、交響曲、ピアノ曲など多岐にわたります。特にオペラにおいて、ドラマティックで情熱的な作風が評価されています。

### 器楽作品

- **《交響曲ハ長調》(1855 年)**: ビゼーが 17 歳の時に作曲した交響曲。若々しいエネルギーとフランス風の優雅さが融合した作品です。
- **《アルルの女》(1872 年)**: 劇付随音楽で、後に組曲としても人気を博しました。南仏の情景と哀愁を帯びた旋律が特徴的です。

### ピアノ作品

ビゼーはピアノ曲も多数作曲していますが、彼の名声は主にオペラ作品で確立されました。ピアノ作品としては、初期の《二つのロマンス》や《幻想曲》などが知られていますが、一般的にはオペラほど評価されていません。

ジョルジュ・ビゼー(Georges Bizet, 1838-1875)は主にオペラ作曲家として有名ですが、彼はピアノ作品もいくつか残しています。ビゼーのピアノ曲は、彼の優れたメロディーメイキングの才能と、しばしば独特のフランス的なエレガンスが感じられます。それでは、彼の代表的なピアノ曲を 1 曲ずつ詳しく見ていきましょう。

## 1.「子供の遊び」組曲 Op. 22

ビゼーの最も有名なピアノ曲の 1 つで、オーケストラ版としてもよく知られています。この作品はもともとピアノ連弾のために作曲され、12 の小さな楽章から成る組曲です。それぞれが異なる子供の遊びを描写しており、軽快でユーモアに富んだ楽しい雰囲気があります。

- 1. La toupie(こま)
- 2. La poupée(人形)
- 3. Les chevaux de bois(木馬)
- 4. Les quatre coins(四角のゲーム)

- 5. Colin-maillard（目隠し鬼）
- 6. Saute-mouton（ひつじ跳び）
- 7. Petit mari, petite femme（小さな夫婦）
- 8. Le bal（舞踏会）

ビゼーは子供らしい無邪気さを描写しつつも、各曲の中に洗練された音楽的な表現が見られます。

## 2.「ロマンス」

「ロマンス」はビゼーの初期の作品の 1 つで、シンプルながらも美しいメロディが特徴的です。短い作品でありながら、優雅で感傷的な表現が強く、フランス的な繊細さが感じられます。この作品は、ビゼーの他の多くのオペラ作品に見られる情感豊かなメロディ作りの技術を感じさせるピアノ曲です。

## 3.「ノクターン」

この曲もビゼーの初期作品で、ショパンやフィールドの影響を受けています。穏やかでロマンチックなムードが漂い、ビゼーが若い頃から持っていたメロディの才能と、彼の音楽に対する感覚の鋭さが現れています。

## 4.「カプリッチョ」

「カプリッチョ」は、ビゼーが 19 歳の時に書かれた自由形式の作品で、明快なリズムと大胆な和声が特徴です。技巧的な要素も多く、ビゼーのピアノの技術を披露する目的も含まれています。リズミカルでエネルギッシュな表現が際立っており、ビゼーの個性が感じられます。

## 5.「グランド・ワルツ・ド・コンサート」

この作品はビゼーが 10 代後半に作曲したもので、華やかで活気に満ちたワルツです。ショパンのワルツに影響を受けつつも、ビゼーの独自の魅力が感じられ、リズムのダイナミズムやエレガントな旋律が特徴です。

### 6.「変奏曲」

この作品は主題と12の変奏で構成されており、主題が様々な形で展開されます。ビゼーの変奏曲では、彼の対位法の技術が試されており、楽曲の各変奏において異なる音色と表情を持たせる工夫がなされています。

### 7.「ピアノソナタ ハ長調」

ビゼーが若い時期に書いたピアノソナタで、彼の器楽作品の中でも特に興味深いものの1つです。伝統的なソナタ形式を守りつつ、彼独自の明快な旋律と和声が際立っています。エレガントな第1楽章、感傷的な第2楽章、技巧的なフィナーレと、全体にフランスの明るさと品格が感じられる作品です。

---

ビゼーのピアノ作品は、彼のオペラ作品ほど多くないものの、彼の優れた作曲技法やフランス的なエレガンスを体験することができます。また、これらの作品はビゼーの若い頃の個性や才能を知る手がかりとなります。

## 思想と音楽観

ビゼーの音楽は、フランス音楽の伝統を守りつつも、新しい表現手法を模索していました。彼はロマン派音楽の影響を受けつつも、イタリアやスペイン、東洋の音楽にも関心を持ち、作品にそれらの要素を取り入れることに挑戦しました。特に《カルメン》ではスペイン音楽の影響が顕著に見られ、異国情緒あふれる作品を生み出す才能が際立っています。

また、ビゼーは音楽とドラマの融合を重視しており、音楽が物語や登場人物の感情をより深く表現する役割を果たすべきだと考えていました。この思想は、彼のオペラ作品において特に強く反映されています。

## 結論

ジョルジュ・ビゼーは、その短い生涯の中でフランス音楽に多大な影響を与えました。彼の作品はオペラを中心に、豊かな感情表現と異国情緒、フランスらしい優雅さが融合しています。ビゼーの音楽は、ロマン派音楽の頂点に立つ作品群の一部として、今もなお世界中で愛されています。